

制度の政治経済学の潜勢力(ポテンシャル ティ) : 金子勝著「市場と制度の政治経済 学」を読む

佐藤, 良一 / SATO, Yoshikazu

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

66

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

253

(終了ページ / End Page)

264

(発行年 / Year)

1998-10-30

《書 評》

ポテンシャルティ

制度の政治経済学の潜勢力*

——金子勝著『市場と制度の政治経済学』を読む——

佐藤良一

1. 金子氏の設定した課題

本書の基礎にある金子氏の問題意識は、既存の経済学では「世界が直面している経済の構造問題を解くことはできない」「問題を取り扱う枠組みそのものが欠如している。」(金子 [1], p. 9, 以下では引用ページのみを記す) という点にある。構造問題とは、具体的には以下の問題群である。

- (1) 石油ショック以降の変動相場制移行と金融自由化がもたらした国際通貨体制の不安定性
- (2) 先進各国で生じた土地・株式への投機とバブル経済の破綻
- (3) 途上国における累積債務問題や国内不良債権問題を契機とする金融市場へのアドホックな公的介入
- (4) 労使関係や系列資本関係などの制度の国際貿易摩擦問題
- (5) 労働人口の高齢化と福祉国家体制の見直し、それに伴う移民・マイノリティ社会との衝突

* 本稿は、法政大学比較経済研究所の研究プロジェクト「欧米政治経済学の諸潮流」研究会で報告された。同日の研究会(1998年3月7日開催)は、「金子勝『市場と制度の政治経済学』をめぐって、Part 1, 2」と題され、評者と長原豊氏(本学経済学部)の報告をもとに金子勝氏を中心として議論がおこなわれた。評者の疑問に対する金子氏の解答を踏まえながら、本稿が作成されていることを付記しておきたい。

(6) 国際自由貿易体制の維持と農産物自由化
 ……等々。(p. 9)

こうした問題意識を出発点に、金子氏が設定した課題は、「新たな〈制度の政治経済学〉の構築＝経済学を再び政治や社会の中に埋め込むこと」(p. 1)にある。この研究課題は、新古典派、マルクス経済学を問わず既存の経済学の徹底的批判・検討作業をとおして、「制度設計の基礎を提示＝国民国家の主権という枠組みを超える制度やルールの形成、それを支える通文化的思考と倫理的規範を提供すること」(p. 206)が目的となる。本書は、この課題の前半部分を展開したものであり、後者についてはさし当たり本書の範囲外である。

本書は、以下のように7章構成がとられている。

はじめに

第1章 市場的領域と非市場的領域—所有論のダイコトミーを超えて—

1. 公共財の理論の陥穽
2. 三大生産要素の市場化の限界
3. 生産要素市場とセイフティ・ネット

第2章 自己決定権と共同性—西欧近代思想のアポリアー

1. 西欧近代思想における〈個と共同性〉
2. 生産要素の市場化の限界と団体主義

第3章 私的所有権の確立過程と社会編成原理—西欧近代における自由主義と民主主義—

1. 私有財産権・課税協賛権・統治構造
2. 地主貴族政と「自由主義」の時代
3. パクス・ブリタニカと植民地財政
4. 近代国家の諸類型

第4章 情報と取引費用—所有権と社会制度—

1. 取引費用の経済学と理論的前提

2. 取引費用の経済史—ノースの経済史論とその限界—

第5章 企業組織と制度分析

1. 企業組織と青木理論
2. 交渉主体の見えない交渉ゲーム
3. 〈熟練の社会的制度化〉と日本の企業組織
4. メダルの裏側—私的自由空間と消費の世界—

第6章 〈制度の構造〉と制度比較

1. 生産要素市場における入口と出口
2. 生産要素の所有権構造と〈制度の構造〉
3. 〈制度の構造〉とマクロ変数間の連関

第7章 自由主義理念と覇権国の政治経済学

1. 覇権国と自由主義理念
2. 国際通貨体制の動揺とセイフティ・ネット
3. 国際労働力移動と「自由主義」

おわりに

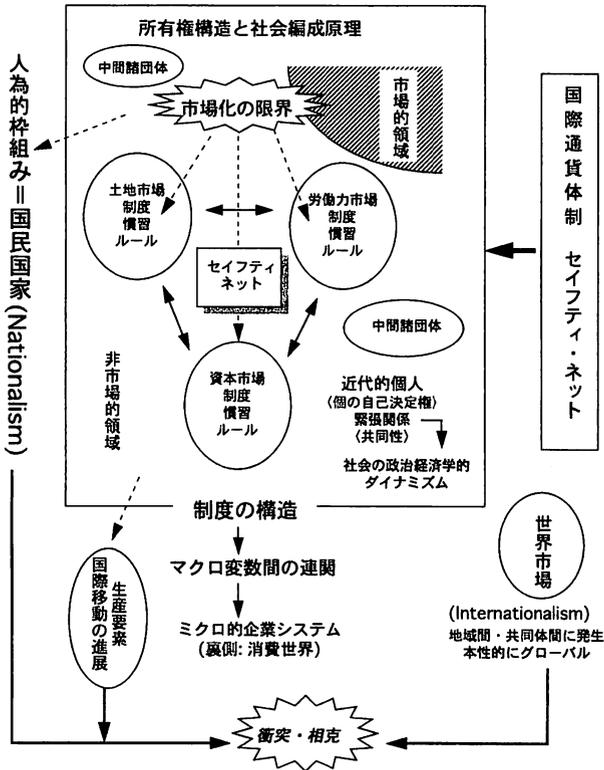
2. 金子氏の〈制度の政治経済学〉

上記の目次を一覧すればすぐに理解されるが、本書の検討対象はきわめて広い。政治思想、経済史、マルクス経済学／宇野理論、公共財の理論、人的資本理論、取引費用の経済学、青木理論、国際マクロ理論、財政学等々。金子氏の研究領域の広さ、読書量、知的食欲さ、エネルギーな研究活動には正直言って、驚かされる。評者の到底及ぶところではない。情報処理能力の〈限界〉ゆえにすべての論点を取り上げられない。ここでは章をおって内容を紹介・論評するという書評の形式をとらずに、金子氏の構想する〈制度の政治経済学〉の枠組みを中心に見ていきたい。

評者は、本書のコアとなるメッセージを「資本主義という経済体制は決して純粋化していくものではなく、本源的生産要素の市場化の限界を処理

するシステムを体制内に組み込まなければ存続できない」と受け取った。金子氏の構想する〈制度の政治経済学〉の眼から、経済システムの構造を見るとどうなるであろうか。敢えて要点を単純化・図式化すれば、図「経済システムの全体的構造」のようになろう。こうしたまとめ方が妥当なものであるかどうか、を念頭におきつつ適宜参照してほしいと思う。

図「経済システムの全体的構造」



全体のストーリーのポイントをなるべく金子氏自身の言葉でまとめてみよう。

2.1 市場化の限界

土地、労働、資本（その基礎にある貨幣）の三大生産要素には、市場化

の限界が存在する。「その市場化の限界から生産要素に所有権が及ぶ範囲は限定的かつ可変的である。」(p. 39)「レッセ・フェールと自動調整的メカニズムは、ヨーロッパ中心史観によって作られてきた神話にすぎない。」(p. 21)

2.2 制度の発生

市場化の限界を処理するために、その国固有の形で生産要素市場の制度化が必要になる。生産要素には市場化しきれない限界があり、市場経済が自己完結し得ない切れ目があり、そこに各国毎に特有な制度の構造が発生し進化していくゲネシス (genesis) がある。

2.3 制度とルールの構造

生産要素市場に組み込まれた制度やルールは、(a)個の自己決定権と共同性が同時に充足されねばならないし、(b)市場外に排除されるものを救済するセイフティ・ネットと連結していなければならない。(pp. 29-30)

2.4 安定性、進化、構造変化

「生産要素市場の構成主体の中、弱い部分から存続可能性が奪われていくと、ある時点でシステム全体が崩壊する危険性を持つことになる。」(pp. 29-30)「重要なのは、セイフティ・ネットと連結した生産要素市場の制度やルールに対する人々の信認が、市場とそれを取り巻く経済社会の構造的安定のために必要条件となるという点である。」(p. 30)

「〈所有権構造〉＝セイフティ・ネットによって最終的に連結される〈市場的領域〉と〈非市場的領域〉との関係性」(p. 31)が問題であって、両者の関係性を正統化する社会編成原理、私的所有権のあり方と連動してきてくる。

覇権国の衰退が、所有権構造と社会編成原理の転換をもたらす。所有権構造と社会編成原理の起点は、所有権を確立したヨーロッパ市民革命に求

められる。「市民革命によって原初的に形成された各国の所有権構造と社会編成原理は、不動のものではありえない。それは、二つの世界大戦・大恐慌・石油ショックといった世界史的画期を転機に再編成されていく。」(p. 77)

「歴史的事実に基づいて言えば、自己調整的市場など歴史上のただの一度も存在したことはないし、政治の領域と独立した経済の領域など存在しなかった。」(p. 53)「問われるべき点は、生産要素の市場化の限界をゲネシスにして制度やルールが発生し、その制度やルールを抜きにしては市場経済も安定的に機能しないという相互関連性とダイナミズムなのである。」(p. 54)

2.5 制度の政治経済学の三つの Dimension

制度の政治経済学は以下の三つの Dimension を含む。(pp. 30-32)
 (a)生産要素市場における制度やルールにおいて、媒介項としての企業、組合、宗教、教育、地域などの中間諸団体が重要な役割を果たす。(b)一国レベルにおけるセイフティ・ネットの制度化は、それを包み込む世界経済レベルでも必要とされる。(c)生産要素市場の制度やルールは、歴史性というダイメンションを持つ。

2.6 制度比較

「生産要素の市場化の限界という観点には、制度の国際比較を可能にする。」(p. 142)「本源的生産要素市場に組み込まれた制度・慣習・ルールこそが、相互関連しつつその国固有の〈制度の構造〉を形成するからである。」(p. 142)

この視点から、日米比較をすれば、生産要素市場における入口と出口における制度化に对照性があることが理解される。「アメリカの場合、生産要素市場の入口において市場メカニズムを最大限機能させるように、セイフティ・ネットが出口に向かって制度化されている。」「日本は、生産要素

市場の入口であらかじめコアの部分を中心にして安定性を確保する制度化がなされる一方で、出口には定型化されたセイフティ・ネットは設けられていない。」(p. 143)

2.7 マクロ変数間の連関

「本源的生産要素市場間に形成される固有の〈制度の構造〉が企業の資本蓄積を規定していくという視角が決定的に重要」(pp. 163-64)である。

3. 〈制度の政治経済学〉の^{ポテンシャルティ}潜勢力

冒頭で触れたように金子氏は、現代世界が直面している構造問題を読み解くための《新たな枠組み》の提示を志向している。既存の経済学をどの点でどのように乗り越えられているだろうか。本書は、あくまでも現在進行中のプロジェクトの基礎となる理論的枠組みを展開しているものであって、けっして完成されたものではない。しかし新たな〈制度の政治経済学〉が頑強な新古典派理論にとって代われるかどうかは、その枠組みが理論的広がりをもちうるかどうか^{ポテンシャルティ}＝^{ポテンシャルティ}潜勢力にかかっている。これから大いに展開されていく理論に対して、これこれ論じていないとか、この点を見落としているといった物言いは、あまり生産的ではないだろう。それでも、ここでは金子氏の今後の理論展開への大いなる期待をこめて、いくつかの論点についてコメントしてみたい。

3.1 本源的生産要素の市場化の限界

土地・労働・資本の本源的（本来的に生産し得ない）三大生産要素には、「本来的に市場的处理になじまない性質を有しており、その市場化には限界がある。」(p. 8)ここに金子氏の議論の出発点がある。その意味で、「生産要素の市場化の限界」は最重要概念である。

ところで新古典派理論では、財を、排除性・競合性をもつかどうかで、

私的財と公共財に区別する。非排除性・非競争性をもつ財を市場を通じて供給しようとするれば、うまく処理できない＝市場の失敗。したがってそのような性質をもつ財は公共部門によって供給されねばならない。公共財を除外してしまえば、あとはすべて市場にまかせればいい。市場メカニズムをつうじて財・サービスは最適に配分される。

こうした新古典派の考え方にたいして、金子氏は、非排除性・非競争性をもつ「財・サービス（軍隊、警察、医療、教育など）が実際に公共部門によって処理されるか否かは、財・サービス自体がもつ性質によって決まるというよりは、当該社会の社会関係によって決まってくると考える方が妥当であろう」（p. 8）と主張する。だが、一方で「生産要素の市場化に限界が存在するのは、…財の性質として本源的生産要素には市場化の限界があるからである」（p. 82）と述べる。

とすれば市場化の限界の根拠をどこに求めるのか。財の性質で決まるのか、社会関係で決まるのか。新古典派のように「非排除性・非競争性という財の性質」ではなく、「再生産不能、供給が固定的という財の性質＝本源性」に求めるのが金子説なのであろうか。こう言うのは不正確かもしれない。具体例で考えよう。本来的に生産し得ないという意味での本源的生産要素ではないが「警察」を例にとろう。新古典派の「財の性質」にもとづく分類からすれば、公共財になる。だが現実には私的警備会社が一部の警察機能のサービスを代替して市場を通じて供給している。つまり単に「財の性質」に基づいて、私的財・公共財の区分がなされるのではなく、当該国の「歴史的な社会関係」によって決まるというわけである。だが「警察」は生産要素の所有権保護のありようを定めるものではあっても、生産要素そのものではない。

土地・労働・資本を「財の性質」から見て、同じものとして括ることができるだろうか。労働力という「財」は、主体と客体の分離不能性（取引関係に本源的対立が存在）、減価償却・廃棄不能という性質をもつ。土地には、埋め立てなどを考えない限り生産不能、固定性、消耗しないなどの

性質があり、資本という「財」はそもそも「集計量として定義不能」であり、財としての性質を労働・土地のように論ぜられない。

市場化＝商品化と理解するならば、本来商品化し得ない「？」を商品化しようとする点にシステムを不安定化させる根源がある、と金子氏の議論を読みたい誘惑にかられてしまう。「？」に《三大本源的生産要素》を入れずに、《労働力》のみを入れる議論とどのように質的に異なるのであろうか。言い方を変えれば、労働（正確には労働力）と土地、資本（貨幣）を同格に「生産要素」と指定して論ずることが妥当か、ということである。

「市場的選択になじむか否か」を基準にして、本源的生産要素を理論の出発点にすえて、市場機構の危うさを示そうとしているのが金子氏の議論なのであろうが…。

3.2 制度の進化，システム転換，資本制経済の発展

市場化しきれない切れ目＝市場化の限界を処理しなければならないところに制度が生まれる起源が求められる。そして「市場経済が自己完結し得ない切れ目が拡大して従来の慣習的行動パターンが通用しなくなる時、コンフリクトを契機にして制度が進化する。」(p. 2) と論じられる。なぜ「切れ目」が拡大していくのか、その契機、拡大のメカニズムは何か。コンフリクトの発生が制度を「進化」させるプロセス、そのメカニズムはどういうものなのだろうか。

「パクス・アメリカナの動揺に伴って生産要素（特に資本と労働）の国際移動が大幅に進展したために、Internationalism と Nationalism の相克が激化した時代」(pp. 3-4) として現代を捉える。「現在我々が生きている福祉国家体制とは、財産権を中心とする近代国家の原理をはみ出してしまった国家体制なのである。」「近代国家から現代国家への転換は、所有権構造と社会編成原理の根本的転換を伴っているのである。」(p. 93) 「近代国家から現代国家への転換が総力戦を契機に生じた」(p. 94)

分析の起点が所有権を確立したヨーロッパ市民革命に求められ、「市場

化の限界の処理」をゲネシスにして、制度の発生、進化、システム転換が説かれるわけであるが、「二つの総力戦、大恐慌、石油危機」を契機として区分される各歴史的時期はどのように特徴づけられるであろうか。土地・労働・貨幣などの各面における具体的制度、ルール、慣習として、土地に関わるもの〔農地や借地権の保護、土地住宅政策・都市計画、環境保護政策 (p. 30)〕、労働に関わるもの〔熟練の社会的制度化、福祉国家的諸制度 (p. 30)〕、金融に関わるもの〔中央銀行制度、預金保険機構、SDR の貸付、IMF の緊急融資、為替レートの変更 (p. 31)〕、そして国際制度として IMF=GATT 体制が挙げられている。「市場化の限界の処理」が全体を貫く中心軸となつて、制度・ルールとシステムの構造の進化過程、動態的過程とどのように結びついていくのか、という点である。

「宇野弘蔵の段階論は抽象の根拠から誤っており現状分析にとっての中間理論の役割を果たし得ない」(p. 175) との立場をとる以上、資本制経済の発展段階という考え方は採らないのであろうが、進化のプロセスの内のメカニズムが必ずしも明確に把握できなかった。

3.3 マクロ動態の把握

「本源的生産要素市場間に形成される固有の〈制度の構造〉が企業の資本蓄積を規定していくという視角が決定的に重要」との指摘を先に引用した。重要な指摘であると思う。しかし、例えば、50～60年代の高成長と70年代の瓦解をどう説くか、といった資本蓄積過程の分析にこの視角がどのように生かされていくのだろうか。

経済学を名乗る以上、経済システムの再生産のありよう、そのマクロ構造、主要な経済変数がどのように決定され、それらがどう変化していくのか、といった問いには答えが準備されていなければならないであろう。〈制度を重視する〉という視角を共有しながら、マクロ分析を進めている構造マクロ理論、蓄積の社会的構造 (SSA) 理論には、モデルが備わっている。

例えばマーグリンは、「われわれの分析の焦点は、マクロ経済構造、国際秩序、生産システム、そして相互調整ルールのあいだの相互作用にある」（マーグリン [5], p. 4）と述べる。ここで相互調整ルールとは、「個人、企業、国家などの主体の行動を相互に一致させるとともに、マクロ構造および生産システムの切迫した事態に主体を適応させる方法」であり、具体的には価格メカニズム、政治的強制、文化的価値、賃金メカニズム（監督と統制、生産過程の監視）が挙げられる。そして「福祉国家、その力が強い国においてさえ従順であった労働組合運動、需要管理の実行、そしてアメリカ合衆国の国際的な指導力こそが、戦後資本主義体制が作動すべき枠組みをなしていたのである」（同上, p. 9）という分析結果を得ているが、基礎にある中心テーゼは「戦後のマクロ経済構造の決定的に重要な要因は、投資需要である」（同上, p. 10）り、「利潤率が資本主義経済の成長にとって中心的役割を演じている」（同上, p. 32）ということである。

〈制度の政治経済学〉にもマクロ分析が求められるが、どのように考えるのであろうか。簡単なマクロモデルを用いて、経済システムのワーキングを調べる、という思考方法に慣れ親しんできた評者の狭い関心領域に引きつけ過ぎたコメントになってしまったかもしれない。

4. 制度のオルタナティブ設計

望ましい制度設計——「国民国家の主権という枠組みを超える制度やルールの形成」（p. 206）——をしていくことが金子氏の本書に続く課題となってくる。「市場化の限界の処理」を中心にすすめる場合、例えば「新たな制度を形成する主体をどこに求めるのか」という現実的問いに対しては、どのようにアプローチしていくことになるのだろうか。ヨーロッパ市民革命以降現代までの歴史的過程を「市場化の限界」を軸に分析を進めるからには、おそらく本源的生産要素の「市場化になじまない性質」を分析上所与としつつ、市場が安定的に作動するためのセイフティ・ネットを提示して

いくことになるのだろう。

ここではじめに取り上げた論点に戻ることになる。経済システムは市場化しえない領域を排除し得ないという点を最終的にどう見極めるかである。商品化し得ないものを無理に商品化しているから、システムが不安定になると言ってしまうえば、商品形態そのものをなくす＝資本制システムを転換する、という方向になる。いわばマルクスの立場である。しかし歴史的事実から見ても、この方向性は現実に否定されている。オルタナティブを求めなければならない。改めて市場がどのようにワークするのか、という経済学の基本問題に関する確たる知見——もちろんそれは新古典派を基礎とするものではない——が求められる。こうした基本問題を考える手がかりの一つとして金子氏の議論は、きわめて有益である。今後、金子氏の本書をめぐって大いに議論が起こることを期待したい。

参考文献

- [1] 金子勝『市場と制度の政治経済学』東大出版会、1997年9月
- [2] 金子勝「市場と制度—規制緩和論の落とし穴—」『月刊フォーラム』1996年6月号
- [3] 金子勝「「帝国主義」概念と世界史」『情況』1997年12月号
- [4] 金子勝「市場の歴史・国家の歴史」『大航海』1998年1月号
- [5] S. A. マーグリン「戦後資本主義の黄金時代の教訓：概観」『資本主義の黄金時代』東洋経済新報社、第1章、1993年
- [6] 佐藤良一「資本制システムを《超えて》思考する」『経済セミナー』1998年4月